

2011FIBA アジア男子バスケットボール選手権におけるゲーム分析

—長身者を擁するチームに対しての戦術分析—

GAME ANALYSIS-2011 The 26th FIBA Asia Championship for Men Offensive & Defensive Strategy Against Big Post Player's Team

山本 明 Akira YAMAMOTO

概 要

本論は、2011 年 9 月中国・武漢にて開催された FIBA (Federation of International Basketball Association) アジア男子バスケットボール選手権 (The 26th FIBA Asia Championship for Men) におけるゲームを題材に、長身者を擁するチームに対しての戦術面の考え方をオフェンス・ディフェンス両面から考察することおよびアジア強豪各国チームのバスケットボールを明確にすることを目的とした。

結果、トライアングルオフェンス・ホーンセットは有効であったこと、ハンドオフプレー・ビッグマン以外のローポストプレーも有効であったこと、ゲームテンポのコントロールのためにもターンオーバーを少なくすること、ローポストディフェンス・リバウンド対策が重要であったこと、個々の強さと判断力が重要であったこと、マンツーマンとゾーンの準備は必要であったこと、リバウンド技術やリバウンドへの意識が重要であったことなどが明らかとなった。

キーワード

2011FIBA アジア男子バスケットボール選手権
長身者対策
ディフェンス&オフェンス戦術
ヨルダン
韓国

The 26th FIBA Asia Championship for Men
Big man
Defense & Offense Strategy
Jordan
Korea

目 次

- 1 序論
- 2 各国の特徴
- 3 考察
- 4 まとめ

1 序論

1.1. 目的

本論は 2011 年 9 月中国・武漢にて開催された FIBA (Federation of International Basketball Association) アジア男子バスケットボール選手権 (The 26th FIBA Asia Championship for Men) におけるゲームを題材に、長身者を擁するチームに対しての戦術面の考え方をオフェンス・ディフェンス

両面から考察することおよびアジア強豪各国チームのバスケットボールを明確にすることを目的とするものである。

1.2. 2011FIBA アジア男子バスケットボール選手権

FIBA アジア男子バスケットボール選手権 (The 26th FIBA Asia Championship for Men) はロンドン五輪アジア予選を兼ねて行われ、優勝国のみが自

動的に出場、2位と3位は2012年7月の世界最終予選への出場となる。

試合形式は参加16カ国を4つのグループに分ける。1次リーグを4カ国で戦い、上位3カ国の計12カ国が2次リーグへ進む。2次リーグは2つのグループを形成して6カ国ずつで対戦、1次リーグの結果を持ち越しながら順位を決定し、各グループ上位4カ国の計8カ国が決勝トーナメントへ進む。

結果、中国が優勝してロンドン五輪出場権を獲得、2位ヨルダン、3位韓国が世界最終予選へ出場した。日本は準々決勝で韓国に67-86で敗れ、順位決定戦にまわりレバノンに78-80で負け、7位決定戦で台湾に81-72で勝ち結果7位であった。

1.3. 研究方法

インターネットのFIBA.TVサイトから試合映像を観戦し分析を実施した。また大会公式サイトから公式スタッツをダウンロードしてデータとした。

1.4. 対象ゲーム

飛び抜けた長身者がいないヨルダンが2位となり、日本のライバル国である韓国が3位となった。長身者を擁する中国、イラン、フィリピンとの戦い方を分析することとした。対象ゲームは以下の8ゲームである。

- 1) イラン対韓国 (2次リーグ)
- 2) 中国対ヨルダン (2次リーグ)
- 3) フィリピン対ヨルダン (2次リーグ)
- 4) イラン対ヨルダン (準々決勝)
- 5) フィリピン対ヨルダン (準決勝)
- 6) 中国対韓国 (準決勝)
- 7) 中国対ヨルダン (決勝)
- 8) フィリピン対韓国 (3位決定戦)

2 各国の特徴

2.1. ヨルダン (JORDAN)

2.1.1. メンバー

2.1.1.1. スターティングメンバー

スターティングメンバーは#10 (198cm)、#5 (189cm)、#15 (203cm)、#14 (200cm) の4名が不動であった。試合により#6 (205cm)、#7 (202cm)、#9 (201cm) が入れ替わることがあった。2次リーグでは#6がスタートであったが、準々決勝と準決勝は#9、決勝は#7であった。#15が3番ポジションと

4番ポジションを兼ねることができると、相手に適したマッチアップを配置したものと思われる。

2.1.1.2. メンバー構成 (表1)

21歳の選手から35歳の選手で構成。平均年齢は28.2歳。平均身長は198.3cmであり大会出場国の中で第2位である。しかしながら205cm以上の選手はおらず、高身長の選手がインサイドにいるとはいえない構成である。

ポイントガードは#5で189cm、時には#10がガードを務める場合があり198cmあることから起点となってオフェンスを行うこともあった。控えのガード#11も189cmである。シューティングガードと見られるが、#12が欠場していたこともあってポイントガード起用となることもあった。

シューティングガードが#5やおそらく#11であった。

フォワードは#7が202cm、#15が203cmの選手、インサイドは#14が200cm、#6が205cmの選手である。控えに#13 (198cm)、#4 (205cm) がいた。

2.1.2. 公式スタッツからの分析

2.1.2.1. 得点力 (表2)

得点力のあるプレイヤーは#5であり平均19.2点 (1次リーグから決勝まで9ゲームでの平均)、ついで#10が平均14.8点、#15が平均11.0点であった。

2.1.2.2. 3ポイント (表3)

ヨルダンの3ポイント試投数は199本で平均22.1本である。また成功数は58本で平均6.4本である。3ポイント成功率は58/199 (29%) である。

決勝の中国戦で6/18 (33%)、準決勝フィリピン戦で5/17 (29%)、準々決勝のイラン戦で10/23 (43%) であった。2次リーグの中国戦で11/22 (50%)、フィリピン戦で4/26 (15%) であった。

#11がシューターであり (16/50、32%) ついで#5 (11/39、28%)、#9 (5/27、19%)、#13 (5/14、36%) である。

イラン戦の勝利は#11と#13の3ポイントが大きな貢献をしている。

2.1.2.3. ファストブレイクポイント (表4)

ヨルダンのファストブレイクポイントは87点で平均9.7点である。

2.1.2.4. ターンオーバーからの得点（表4）

ターンオーバーからの得点は 153 点で平均 17.0 点である。これは他国と比較しても多く、ターンオーバーを誘発していることが伺える。イラン、フィリピン、中国と自国のターンオーバーからの得点が多く、相手にやられた得点が少ない。これは自チームのターンオーバーが少なく、相手は多いということであり、ゲームの進め方が良かったことを示している。

2.1.2.5. ペイントでの得点（表4）

ペイントでの得点は 310 点で平均 34.4 点である。

2.1.2.6. セカンドチャンスでの得点（表4）

セカンドチャンスからの得点は 123 点で平均 13.7 点である。それほど多くなく、相手の方が上回っている部分である。決勝の中国戦はやられた得点が多い。

2.1.3. ヨルダンのオフェンスの特徴

2.1.3.1. トランジション

非常に速いと感じられた。失点後もすぐにスローインしてファストブレイクでの得点シーンが数度見られた。特に相手のガードがレイアップで決めた後、セーフティの意識が足りないチームに対してはすぐにゴール下へボールを送り、イージーポイント을挙げているシーンが見られた。意識して狙っているものと思われた。またゾーンディフェンスからの速攻についても意識が高く、チャンスがあればファストブレイクでの得点を狙おうとする姿勢が感じられた。

ファストブレイクでのレイアップが狙えなくても二次速攻としての 3 ポイントやドライブを狙う姿勢も常にあった。このチャンスを作るために逆サイドへのスキップパスがよく行われていた。インサイドポストアップでのシールはやらないわけではないがそれほど積極的ではなかった。しかしミスマッチが起こっているときなどは狙う姿勢はあった。

ただしどんな状況でもショットを速くする、ということではなくいいショットセクションが守られていたように感じられた。

2.1.3.2. レギュラーオフェンスパターン

メインオフェンスはトライアングルオフェンスとホーンセットからのオフェンスであった。これらのエントリーからピック&ロールをよく行いドライブ

やアウトサイドショットのチャンスを作っていた。

トライアングルオフェンスではスペースを広く取ってドライブしやすくしているように思われた。使われた 2 対 2 はダウンスクリーン、ピック&ロールが多かった。また、相手の 4、5 番が大きい場合、4、5 番がアウトサイドやハイポストに配置されて攻撃が始まるケースが多く見られた。スタート位置がローポストではなく、ヘルプサイドのウイングまたはトップ、ハイポスト近辺というオフェンスがよく見られた。

ローポストでのポストアップが多く行われるというオフェンスではなかった。5 番がそれほど大きくないので、#5、#10 や#15 がポストアップするケースが見られた。

ホーンセットも 4、5 番が高い位置におかれて始まるオフェンスであった。ダウンスクリーンへ向かうパターン、ピック&ロールのエントリーからダイブするパターンとポップしてアウトサイドを狙うパターン、PG にリピックするパターン、トレールプレーからフレアスクリーンを狙うパターンが試合により、またピリオドにより変えられていた。

2.1.3.3. ゲームによるオフェンスの違い

メインとなるトライアングルオフェンスのスペーシングはそれほど変わらないが、エントリーとなるプレーが変わっていた。

2.1.3.3.1. フィリピン戦（2 次リーグ）

2 次リーグでのフィリピン戦においては、トライアングルオフェンスを行い、第 1 ピリオドではコーナーパスからのカッティング、展開パスからのカッティングを用いた。第 2 ピリオドでは展開からダウンスクリーン、コーナーパスからのカッティングを用いた。

2.1.3.3.2. イラン戦（準々決勝）

準々決勝でのイラン戦においてもトライアングルオフェンスを行い、第 1 ピリオドでは#15 のポストアップ、展開からダウンスクリーン〜ハンドオフプレーを用いた。イランの 5 番プレイヤー #15HADADI (218cm) のマークマンである#14 はヘルプサイドかトップの位置からスタートし、ポストアップはしなかった。第 3 ピリオドでは#10 が 1 対 1 をローポストで行った。相手の PG とはミスマッチが起こっており、この弱みをつくオフェンスが

多く見られた。

しかし優勝候補と見られていたイランに勝つことができた要因は#13 (5 番プレイヤー) の 3 ポイントが 2 本決まり追いついたこと、第 4 ピリオドで#11 (PG) の 3 ポイントが 2 本、再び#13 の 3 ポイントが決まったことであろう。第 4 ピリオドにおいてはそれほど複雑なパターンのオフェンスはなく、#10 や#5 のピック&ロールや 1 対 1 においてショットチャンスを作り、アウトサイドの 3 ポイントにつなげたものが多い。

2.1.3.3.3. フィリピン戦 (準決勝)

準決勝のフィリピン戦では、第 1 ピリオド#5 のローポストプレーから入った。相手のガードのミスマッチを突く戦略が推測された。5 番プレイヤーに 210cm のプレイヤーがいるため、5 番以外のプレイヤーがポストアップするケースが多かった。ドライブを行うがビッグマンがいるため容易にショットができずアウトサイドにパスを出すことが多く見られた。第 2 ピリオドではコーナースパスからのカッティングを行っていた。

第 3 ピリオド、トライアングルオフェンスとホーンセットを使い 3 ポイントを効果的に決めた。第 4 ピリオド、開始当初はアウトサイドがほとんど入らず 49-48 と追いつかれたがそこから#15 のローポストプレー、#10 の 3 ポイント、タイムアウト後のゾーンでの 3 ポイント 2 本で勝利を引き寄せた。

2.1.3.3.4. 中国戦 (決勝)

第 1 ピリオドはファストブレイクと#5 の 1 対 1 で先行した。ホーンセットからフレアスクリーンでの#5 の 1 対 1、#10 のローポストプレーにより得点を重ねた。ホーンセットにおいてもピック&ロールからフレアスクリーンが多かったが、ピック&ロールに変更しており相手のディフェンス対策を避けた戦術をとっているという事が推測された。

身長差が約 20cm の 5 番プレイヤーであったが、オフェンスリバウンドによく入り、ティップしてのオフェンスリバウンドが数本取れていた。

第 2 ピリオドは中国の控えのガードに対してミスマッチを突くプレーが数回見られた。これにより中国はこのガードをベンチに戻さざるをえなかった。ホーンセットからダウンスクリーンでトップでの 1 対 1 を作るエントリーを用いて、ビッグマンのスイッチしにくいところを狙ってきていた。トライアン

グルではコーナースパスからのカッティングエントリーが見られた。

ビッグマンのマークマンからアウトサイドプレイヤーへのハンドオフプレーも多く行われていた。スイッチしにくいところを狙ったものと思われる。このハンドオフプレーは有効なプレーであると感じられた。

ベースラインドライブを行った際にはフリースロー近辺からゴールへ向かっての動きで合わせてくるプレイヤーがおり、この動きで数回フリースローを得ている。

このゲームにおいて効果的であったのはファストブレイクである。ゾーンディフェンスによるターンオーバー、リバウンドからのファストブレイクにより点差を詰めて行く場面が多く見られた。

2.1.3.4. ゾーンオフェンス

シンプルな 3 アウト 2 インの配置からゾーンオフェンスを行っていた。

スペースを広く取ってウイングマンからの 3 ポイントがいくつか決まっていた。

2.1.3.5. OB プレー

ほとんどゲームでは変えずに行っていた。#10 やスローインした#5 にチャンスを作るプレーが多かった。

2.1.3.6. オフェンスリバウンド

5 番としては小さい#14 (200cm) のオフェンスリバウンドが所々で機能していた。小さいながら身体を寄せて相手を自由に跳ばせずリバウンドボールに絡むケースが多く見られた。上背はないが、身体の幅がありコンタクトに強いプレーを行っていた。ジャンプ力がそれほどあるわけではないように思われるが、コンタクトしながらもジャンプをする力があり、ボールに触ることができていた。オフェンスリバウンドに絡むためにペイント内へ入り、コンタクトしながらポジション取りを行うことも小さくとも重要な動きであると認識させられるプレーを行っていた。

2.1.4. ヨルダンのディフェンスの特徴

2.1.4.1. 対戦の違いによるディフェンス

2.1.4.1.1. 中国戦 (2 次リーグ)

マンツーマンからスタート。ローポストディフェ

ンスはボールマンがベースラインへ追い込むスタンスを取り、ベースライン側でトラップを仕掛けるものであった。

フリースローからは 2-2-1 ゾーンプレス、そこから 2-3 ゾーンであった。2-3 ゾーンを 1-1-3 ゾーンに変化させることもあった。

タイムアウトを中国が取りヨルダンマンへ戻した。

第 2 ピリオドに入り、フリースローの後は 2-2-1 ゾーンプレスから 2-3 ゾーンであった。

中国の#11 のローポストプレーに対して、ボールマンは密着してノーミドルのスタンスを取り、ベースライン側にはヘルプがいるディフェンスを徹底した。2-3 ゾーンの形に見えるものである。

リバウンドはトップから飛び込んで奪取することが目立った。ビッグマンにはコンタクトしてペイント内へ入れさせないことが多かった。

第 3 ピリオド、ポストフロントのディフェンスを行っていた。これに対して中国はハイローを狙ってきていた。

サイドピック&ロールに対してはベースラインへ追い込むディフェンスが行われていた。

3-2 ゾーンも行う時間帯があった。

第 4 ピリオドに入ったときには 25 点以上の点差があり、勝負がついていた。

2.1.4.1.2. フィリピン戦（2 次リーグ）

マンツーマンからスタート。ローポストのディフェンスも同じ、ベースライン側へ追い込むものであった。

タイムアウトを取った後、ディフェンスはスイッチマンツーマンのように変化した。

フィリピンのフレックスオフェンスに対してスイッチで対応していることが多かった。ヨルダンのプレイヤーは多くは 200cm 近い身長であるためスイッチしてもそれほど問題は生じていなかったため有効であった。

ローポストのディフェンスはベースラインに追い込むものであったが、身体の寄せ方がタイトであり隙間がないので簡単にやられていなかった。

2-3 ゾーンであってもマンツーマンであってもローポストの守り方は同じであった。マンツーマンから 2-3 の形へ変化する、ということである。

2.1.4.1.3. イラン戦（準々決勝）

マンツーマンでスタートするが、7 分 30 秒で 2-3 ゾーンへ変化させた。ローポストはトラップするケースが見られた。

タイムアウトの後、2-3 ゾーンであるが広がりを見せてマッチアップのような様相に変化した。

第 2 ピリオド、マンツーマンからスタートしたがプレッシャーは厳しいものであった。また早い時間帯でゾーンに変化させた。

4 人がゾーンディフェンスをしてビッグマンにマッチアップするプレイヤーはマンツーマンでつき、ハイポストやローポストへすべてついていくというゾーンを行っていた。これによりリバウンドでフリーにすることがなく、常にコンタクトを行いリバウンドでの相手の優位性をできる限り消すことができていた。

第 3 ピリオド、フリースローからは 2-2-1 のゾーンプレス、それから 2-3 ゾーンであった。ゾーンは #15HADADI にマッチアップして残り 4 人がゾーンの形を取るものであった。

ファストブレイクの状況で 2 点を取られそうになるとファウルでフリースローにさせるプレーが目立った。これにより 2 点ではなく 1 点で終わるケースも多くあった。

タイムアウトを取られた後はマンツーマンに一度戻し、またゾーンを行う、という細かなディフェンスの変更も見られた。

第 4 ピリオド、マンツーマンからスタート。6 分 30 秒で 2-3 ゾーンとした。64-71 と負けている状態であった。ここから特にフルコートに展開をしたということではなく、フリースローの後は 2-2-1 ゾーンプレスを見せるものの、着実なハーフコートディフェンスを行っていた。この 7 点差から #11 の 2 本連続の 3 ポイント、#5 の 1 対 1 で 8 点を取り 72-73 と追いつく。#5 の 3 ポイントでついていき、ディフェンスからブレイクで #9 が決めて 2 分 20 秒に 77-76 と逆転する。イランの #15 も 2 点を取るが、#13 の 3 ポイントが決まり 80-78 とリードする。

マンツーマンに変えて終盤を乗り切り勝利したゲームであった。

2.1.4.1.4. フィリピン戦（準決勝）

マンツーマンからスタート。マンツーマンは最初からスイッチディフェンスであった。ローポストプレーに対しては 2-3 ゾーンの形からの対応であった。マンツーマンであってもスイッチマンツーマンをし

ていることからゾーンのように見えるディフェンスであった。

フリースローからは2-2-1のゾーンプレスを行い、マッチアップゾーンを行った。

第2ピリオド、2-3 ゾーンを行った。ゴール下では身体を寄せてプレッシャーをかけ、そのショットに対して周囲がブロックショットを狙っていることが多くあった。ゴール下でフリーのショットを打たせることが少なかった。ロースコアのゲームとなり、27-28で前半を終了した。

第3ピリオド、マンツーマンからスタート。すぐにゾーンに変化させた。中をしっかりと固めるゾーンであった。フィリピンの#11に一人がマッチアップして残り4人がゾーンであった。リバウンドでのブロックアウトが徹底されており、それほど#11をフリーにはしなかった。

第4ピリオド、ゾーンとスイッチマンツーマンを併用させていた。リバウンドがしっかりとれていたことが勝利につながっていた。61点に押さえ込んだディフェンスが勝利の鍵となった。

2.1.4.1.5. 決勝（中国戦）

3-2 ゾーンからスタート。マンツーマンからスタートしていたこれまでのゲームとは入り方が違った。これに影響を受けたのか、中国は入り方が悪く、リードを奪われて5-0となった。

3-2 ゾーンも2回だけでその後マンツーマンに変化させた。ポストにボールが入ったときにはこれまでと同様にベースライン側へ追い込みヘルパーとトラップを行っていた。このトラップは身体の寄せ方が実にタイトであり、隙間がほとんどなく身長が高くとも動けないという感じになりショットが落ちていた。

#14Wangは3ポイントも打てる4番であったが、ほとんどチェックに行かずそのプレーはやらせているという感じであった。

第2ピリオド、ディフェンスはゾーンであり、1-1-3のような2-3のようなディフェンスを見せた。中国のショットを落とさせ、リバウンドをしっかりと取ることでロースコアのゲームを展開した。ゾーンにおいてはビッグマンにマッチアップする形を取っていた。

第3ピリオド、マンツーマンからスタート、出足に中国に3連続でゴールを奪われ開始2分で36-37と逆転された。中国は時間をかけない思い切りのよ

いショット、そのセカンドショットでの得点、速攻での得点であった。

その後ヨルダンはゾーンディフェンスに変えた。フリースローからはゾーンプレスからゾーンへと変化させていた。ゾーンにすることでテンポが上がっていなかったが、このピリオドで中国は28点を取り、攻撃のテンポを上げた。ヨルダンは勢いを止めることができていなかった。

第4ピリオド、ポイントガードが真ん中にいる2-1-2を見せた。ペネトレーションしてくるプレイヤーのヘルプに立つためであろう。中国は少し勢いが落ちたようであった。

ゾーンディフェンスからファストブレイクにつなげて61-62、4分50秒で61-64という接戦であった。ゾーンディフェンスによりテンポが下がっていること、オフENSリバウンドをそれほど取らせていなかったこと、アウトサイドショットが中国はあまり入らなかったことが要因であろう。

残り4分に#15がファウルアウトすることになった。しかしディフェンスはゾーンディフェンスで踏ん張り、残り45秒で69-69、フリースローにより中国は70-69としてそのまま何とか逃げ切って優勝を遂げた。

2.1.4.2. ローポストにボールが入った時

ペイント内での失点は平均28.4点であり、2次リーグ中国戦34点、イラン戦38点、フィリピン戦32点、中国戦28点であった。

パスと同時にポストトラップに行くケースはほとんど見受けられなかった。ドリブルが起こったらトラップを行うケースが多かった。

ローポストにボールが入った際にはボールマンディフェンスはミドルへ行かせないようにスタンスを取り、ベースライン方向へ行かせるようにしていた。この間合いは非常にタイトであり、距離はほとんど密着しているといつてよいぐらいであった。

ベースライン方向にはヘルパーがポジションを取り、ベースラインへきたときには非常にタイトに身体を密着させるようにして相手の動きを止めていた。体の使い方、寄せ方が上手であると感じた。手のあげ方はまっすぐ上であり、胴体をオフENSプレイヤーに密着させるように寄せていきオフENSの動きを封じていた。

このヘルプを行うためにローポストボールマン、そのヘルパーはリング下、そのマークをカバーする

プレイヤーがその隣に並び、2-3 ゾーンの形で守っているように見えた。

2.1.4.3. ゾーン（チェンジング）

各ピリオドはマンツーマンで入ることがほとんどであった。しかし、準々決勝のイラン戦も第1ピリオド開始 2 分 30 秒からゾーンとなった。準決勝においては第2ピリオドから、決勝においては試合直後からは 3-2 ゾーンの形を見せてすぐにマンツーマン、その後 2-3 ゾーンにするという変化を見せた。

マッチアップゾーンを行うこともあり、2-3 とともにいいにくいゾーン隊形を取っている時間帯もあった。

決勝の中国戦に P G の #11 が真ん中になる 2-1-2 ゾーンを見せた時間帯もあった。ドライブに対してのヘルプを行っていた。

長身者に対してマンツーマンでマッチアップして残り 4 人がゾーンを行うというディフェンスも見せた。これによりリバウンド時のスクリーンアウトが徹底できていた。常にコンタクトしており、簡単に動かすことをさせていなかった。ハイロープレーもさせないように注意してマッチアップしていた。

2.1.4.4. フリースローとプレス

フリースローの後にはほとんどの場合、プレスを行っていた。多くは 2-2-1 であり、時間をかけさせる目的でのゾーンプレスであるように思われた。

回数は少なかったが、1-2-1-1 ゾーンプレスでトラップに行くケースもあった。

ゾーンディフェンスの時間が長かったのでゾーンプレスからは多くはゾーンディフェンスであったが、時にはゾーンプレスからマンツーマンディフェンスを行うこともあった。

2.1.4.5. ディフェンスリバウンド（表 4）

セカンドチャンスでの失点として平均 14.6 点であるが、2 次リーグの中国戦は 17 点、準々決勝のイラン戦は 15 点、準決勝のフィリピン戦は 14 点、決勝の中国戦は 19 点であった。

ゾーンディフェンスにおいても長身者にマッチアップしつづけるやり方であったためゾーンディフェンスでフリーにして 5 番プレイヤーに取られるケースは少なかった。ジャンプして高い位置でリバウンドをもぎ取るというケースは少なく、相手をコンタクトしてスペースを確保する、ボールをティップし

て味方のいる方へはじき出す、といったプレーで確保していることが多く見られた。

コンタクトしながらジャンプする、という強さが感じられた。

2.1.4.6. ディフェンスとファストブレイク（表 4）

ターンオーバーからの得点が平均 17.0 点であり、イラン戦は 23 点、フィリピン戦は 18 点、中国戦は 15 点であった。イラン、フィリピン戦が特に多かったことを示している。

ヨルダンのオフェンスの重要な要素となっていたファストブレイクはゾーンディフェンスから多く起こっていた。リバウンドの獲得の後、ターンオーバーから、失点からであるが、ファストブレイクに走ろうとする意識は高かった。しかしながらリバウンドを確保しなければならないことは当然であり、5 人全員がリバウンドへ参加している場面がほとんどであった。

2.1.4.7. ファストブレイクでの失点（表 4）

相手にやられた点数は 75 点（平均 8.3 点）であり、自チームの 87 点（平均 9.7 点）より下回っている。トランジションディフェンスが良かったことを示している。

2.1.4.8. ターンオーバーからの失点（表 4）

相手にやられた点数は 116 点（平均 12.9 点）であり、自チームの 153 点（平均 17.0 点）より下回っている。ターンオーバーが少なく、オフェンスが注意深く行われていたことを示している。

2.1.4.9. ペイントでの失点（表 4）

相手にやられた点数は 256 点（平均 28.4 点）であり、自チームの 310 点（平均 34.4 点）より下回っている。インサイドディフェンスを強化していることを示している。

2.2. 韓国（KOREA）

2.2.1. メンバー

2.2.1.1. スターティングメンバー

韓国の 9 試合において不動のスターティングメンバーはいない。1 次リーグ、2 次リーグにおいて実力差があるチームとの対戦では若手のスターティングメンバーの起用も行っている。

しかしながら、実際のスターティングメンバーと

しては、#6、#7、#8、#12、#14である。中国相手の時のみ#13がスターティングメンバーであった。

2.2.1.2. メンバー構成 (表1)

20歳から35歳の選手で構成。平均年齢は27.2歳。平均身長は196.3cmであるが一人221cmの#13Ha Seung Jinがおり、これを除くと194cmとなる。それほどの高身長チームとはいえない。

ポイントガードも#6が180cm、#5が183cm、時には190cmの#4が務めた。シューティングガードが#7 (193cm)、#10 (189cm)である。

フォワードはシューターの#8 (198cm)、#11 (194cm)である。

インサイドは#12 (205cm)、#14 (200cm)であり、控えに#13 (221cm)、#15 (207cm)がいた。

2.2.2. 公式スタッツからの分析

2.2.2.1. 得点力 (表5)

9ゲームトータルにおいて韓国で最も得点を挙げているプレイヤーは#8であり平均13.3点(3Pは22/71、31%)、ついで#10が平均11.1点(3Pは19/43、43%)、#14が平均9.1点、#6が平均8.1点(3Pは6/16、38%)であった。インサイドプレイヤーは#14のみであり、他はアウトサイドプレイヤーである。

2.2.2.2. 3ポイント (表6)

韓国の3ポイント試投数は242本で平均26.9本である。また成功数は82本で平均9.1本である。3ポイント成功率は82/242 (34%)である。

フィリピン戦で7/20 (35%)、中国戦で1/20 (5%)、日本戦で11/29 (38%)、イラン戦は4/15 (27%)であった。インド戦では15/43 (35%)、ウズベキスタン戦では19/37 (51%)であった。

#8がシューターであり(22/71、31%)、#10(19/44、43%)、#7 (11/31、35%)、#5 (10/26、38%)である。

3位決定戦フィリピン戦の勝利に貢献したのは#10の3ポイントである。

2.2.2.3. ファストブレイクポイント (表7)

韓国のファストブレイクポイントは93点で平均10.3点である。

2.2.2.4. ターンオーバーからの得点 (表7)

ターンオーバーからの得点は129点で平均14.3点である。それほど高いわけではない。しかもウズベキスタン戦で28点であり、これを除けば平均は12点台となり、それほどターンオーバーを誘発していたわけではない。特に中国戦は2点、フィリピン戦は13点という結果である。中国戦は特別なゲーム戦術を持って戦ったのではないかとこの数字から見受けられる。

2.2.2.5. ペイントでの得点 (表7)

韓国のペイントでの得点は274点で平均30.4点である。

2.2.2.6. セカンドチャンスでの得点 (表7)

セカンドチャンスでの得点は112点で平均12.4点である。中国戦ではわずか2点である。

2.2.3. 韓国のオフENSEの特徴

2.2.3.1. トランジション

トランジションは速い。アウトレットパスを受けたガードがドリブルで運ぶ。ターンオーバーからのファストブレイクやリバウンドからにおいてもボールハンドラーが突破していくことでブレイクになる。パッシングでブレイクを作る形ではなかった。重い展開のゲームであってもファストブレイク一つでリズムががらりと変わる。

2.2.3.2. レギュラーオフENSEパターン

イラン、中国、フィリピンと行ったビッグマンを擁するチームに対してのオフENSEはハイポストに5番が立つケース、プリンスンオフENSE、ピック&ロールが多く行われていた。しかし、メインとなるオフENSEがそれほどはっきりしていたかといえそうではなく、インサイドアウトからの#8の1対1、ピック&ロールからの#6の1対1、#12のローポストやミドルポストでの1対1などが多く見られ、組織的なオフENSEからチャンスを作っているという印象ではない。

1対1と2対2によるオフENSEの組み立てといった方がよい。使われている2対2としては、ハンドオフ、ピック&ロール、ウイングとローポスト、フリースクリーンプレ、ベースラインスクリーンでのウイングプレー、シューターへのダウンスクリーンなどが行われていた。

2.2.3.3. ゲームによるオフェンスの違い

3ポイントの試投数が多くローポストプレーはサイズの面からもあまり多くはない。

2.2.3.3.1. イラン戦（2次リーグ）

#8の1対1からスタートした。#12のローポストプレー、ミドルレンジからのショットでのオフェンスから入った。#12はパスがうまく周りがよく見えているのでオフェンスの起点になることが多い。#12のローポストからインサイドアウトを使い#14のミドルショット、インサイドへの合わせ、#8のアウトサイドへつなげることも多い。

#6の1対1は大きな武器であり、#6と#14などのピック&ロールから1対1でショットに持って行くかアシストするパターンが多い。

#13が出ているときには#15HADADIに対してローポスト1対1を仕掛けていた。

4、5番がハイポストに立ってカッティングをするパターンやプリンスンオフェンスから#8にフレアスクリーンをかけてショットさせるパターンも見られた。

いずれにしてもペイント内にドライブで入っていても#15HADADIのブロックショットが影響を与えており、フィニッシュに至らないケースも多くあった。ダウンスクリーンで上がってきたプレイヤーがハンドオフでボールを受けてピック&ロールの形から攻め込んでいくパターンも多く見られた。4メンアウトでアウトサイドショットの攻めを行った時間帯もあった。ペイント内でプレーすることが難しく、アウトサイドショットが多くなることが多かった。

2.2.3.3.2. 中国戦（準決勝）

インサイドアウトから#8の1対1からスタートした。#8のショット数はチーム1であり、#8をオフェンスの中心としていることが伺えた。

中国の大きさもあるが、#12のハイポストから#13へのハイロープレーを作るケースも見られた。

#13が出ている時間帯でもハイポストオフェンス、プリンスンオフェンスを使用することも多くあった。プリンスンオフェンスでのフレアスクリーンから#8のアウトサイドショットを狙った。

このゲームのアウトサイドショットの確率は大変低く（3ポイントは1/20、5%）このことが点数の

低さにつながっている。

またダブルスクリーンでシューターの#7にチャンスを作るプレー、ダウンスクリーンからハンドオフへとつなげるプレーを行っていた。

パッシングでチャンスを作るというよりはウイングでパスを落とした後にピック&ロールやミドルでもピック&ロールのケースが多い。

#12は#14Wangを相手にドライブをよく仕掛けていた。

第3ピリオドは#6の1対1を続け、3本連続でショットを決めるなどつないでいた。ホーンセットからのオフェンスも行ったがあまり多くなかった。

第4ピリオドは#8の1対1が増えた。1対1に至るまでにパスを多く行うわけではなく、単発の1対1が多い印象であった。

ビッグマン相手にペイント内でのフェイクの使い方が上手である。ドリブルを終えてショットに行く前にフェイクを使いファウルをもらう場面が多く見られた。

ファストブレイクをほとんど出さなかったのか、出なかったのか。ファストブレイクポイントは平均で10点であるが4点であった。中国も平均6.9点であったが5点であり、ほとんどブレイクでの点数はなかった。

2.2.3.3.3. フィリピン戦（3位決定戦）

このゲームも#8の1対1からスタートした。

#11がいるフィリピンに対し、プリンスンオフェンス、スタックからのベースラインスクリーンを使つてのオフェンスを行った。

スタックからのオフェンスはミドルラインドライブ、ベースラインドライブを作り出していた。しかしペイント内に入ると#11のブロックショットの影響でいいフィニッシュにはなかなかつながらなかった。しかし果敢に行く姿勢が見られた。

スクリーナーにスクリーンをかけてチャンスを作るプレー（Screen for Screener Play）も見られた。

フィリピン戦を勝ちきることができた要因は第4ピリオドの#10のアウトサイドショットと#14のインサイドである。タイムアウト明けの#10の3ポイントプレー、#14のローポスト、セカンドショットでの加点がゲームの最後につなげた要因である。

#8の3ポイントが最後に決まり逆転し勝利した。#8のショットはそれまでほとんど入っていなかったが、最後の勝利を決めるショットを打ち、そして

決めた。

2.2.3.4. ゾーンオフense

対戦国がほとんどゾーンを用いなかった。アウトサイドシュート力を警戒してのことだと思われる。

2.2.4. 韓国のディフェンスの特徴

2.2.4.1 対戦の違いによるディフェンス

2.2.4.1.1. イラン戦 (2次リーグ)

マンツーマンからスタートした。ローポストプレーに対してはインサイドヘルプで対応していた。フリースローの後は1-2-1-1 ゾーンプレスから3-2 ゾーンを行うこともあった。

#15HADADIには#12がマッチアップしていた。

フリースローの後、2-3 ゾーンに変化をさせた。

2-3 ゾーンはマッチアップ気味であり、カッティングへもついていっていた。

ファストブレイクが出そうになるとファウルをしてレイアップに持ち込ませないことを行っていた。

第3ピリオドはマンツーマンからスタートしたが、2-3 ゾーンへ変化させた。しかしすぐにマンツーマンに戻した。ローポストパストラップを行ったが、相手のローポストからのパス対応が早く、その後多く行わなかった。フリースローから1-2-1-1 ゾーンプレス、そこからマンツーマンを行うことがあった。

第4ピリオド、4人がガードフォワードとなり、フルコートプレスと4メンアウトのアウトサイド中心のオフenseを行って追い上げを図ったがうまくいかなかった。#12がファウルアウト、残り5分で16点差がついたときに主力を下げた。

2.2.4.1.2. 中国戦 (準決勝)

中国に対してはロースコアゲームを仕掛けた。FG%が結果的に大変低い数字となった (中国 28%、韓国 27%)。ファストブレイクをほとんど出させなかった (中国 5 点、韓国 4 点)。ブレイクが出そうになるとファウルで止めていた。ターンオーバーで相手にボールが渡った場合だけでなく、悪いショットをしてリバウンドを取られた際にもファウルを意識的に行っていい流れでのショットにつながらないようにゲームを止めていた。

マンツーマンでスタートした。ボールプレッシャーも激しく、ポストのディナイも強かった。ポジション取りのところから身体を寄せていいポジション

を取らせないようにしていた。ローポストでボールを持たれたときにはボールマンディフェンスは間合いを詰めて非常に密着してプレーを制限している。しかし方向付けなどは感じられなかった。ペイント内へ入れないという意識が感じられた。周囲はインサイドヘルプのポジションを取り、全員がペイント内にポジションを取っており、ペイント内はスペースがなく入っていくことが難しい状況を作っていた。ボールがアウトサイドに出た際もローテーションが非常に速くイージーなショットは打たせていなかった。必ずといってよいほどドリブルをさせてそのヘルプもポジションが取れておりレイアップに行くことができていないことが多かった。

2-3 ゾーンも見せたが、すぐにマンツーマンに戻っていた。フリースローからはフルコートマンツーマンディフェンスを見せた。ガード陣にプレッシャーをかけていた。

ボールに触れる間合いを維持してプレッシャーをかけ続けており、中国は簡単にプレーすることができていなかった。中国はドライブを意識して行ってきたが、韓国のディフェンスは体を張ることと最後のショットのところまでしつこくプレッシャーをかけていたためショットが入らない状況が多かった。

韓国は手の使い方が上手で、ボールマンディフェンスでのボールへのプレッシャーとしての手の使い方と、周りからのヘルプにおいても、ボールスナップを狙う手が力強く伸びてボールに触ろうとしていることが多かった。

第4ピリオド、10点前後での攻防が続いていたが、フリースローからフルコートマンツーマンプレス、2-3 ゾーンも見せるがすぐにマンツーマンへ戻した。残り5分にはポストパストラップを見せた。パストラップはパサーのディフェンスがパスと同時にトラップへ動いていた。

セカンドショットでやられるケースもあるものの、フリーな状態にせずコンタクトしているかファウルでフリースローにしていることが多かった。

2.2.4.1.3. フィリピン戦 (3位決定戦)

マンツーマンでスタート。#6 がけがのため欠場、スタートは#4であった。

#11には#12がマッチアップしていた。

ローポストプレーにはインサイドヘルプで対応していた。

第3ピリオドには2-3 ゾーンを見せた。しかしあ

まり長い時間は使わなかった。ゾーンでは#11 のセカンドショットが多く行われることもあり、リバウンドへの不安があるように思われた。

マンツーマンの際にポストパストラップを行った。

ビッグマンのリバウンドの際にディフェンスの小さいプレイヤーは下りてくる際のボールスティールを常に狙っており、手を出していた。

第4ピリオドにはポストドリブルトラップをインサイドヘルプから行っていた。身体を寄せての強さが感じられた。上背はそれほどなくてもペイント内への侵入を許さないコンタクトの強さが感じられた。

相手がディフェンスリバウンドを取ったときにそのまますぐにマッチアップしてプレッシャーをかけるディフェンスが見られた。相手がドリブルできないプレイヤーの時は特にプレッシャーをかけている。すぐに自陣に戻るのではなく、プレッシャーをかけていた。

戦術的に目を見張ると言うよりは、個々のディフェンス力でカバーしている部分がまず注目された。個々の身体の強さ、ローテーションの速さを生み出す動きの速さ、判断の速さが個々にある。

2.2.4.2. ローポストにボールが入った時

ペイント内での失点は平均 28.9 点であり、イラン戦 40 点、中国戦 18 点、フィリピン戦 28 点であった。

インサイドヘルプでペイント内に攻め込ませないことが基本となっている。身体を密着させて簡単にプレーをさせないようにしている。ファウルが多くなることは否めず、ビッグマンにファウルが多くなりファウルアウトするケースも多く見られた。

トラップはパスが入ったらすぐに行くパストラップとインサイドヘルプからのドリブルトラップが行われていた。しかしあまり多くは使われていなかった。ポストフロントディフェンスを行うことはなかった。

2.2.4.3. ゾーン（チェンジング）

マンツーマンからスタートするが、3-2 ゾーンをイラン戦で行ったこと、2-3 マッチアップゾーンを行なったこと、2-3 とマンツーマンを切り替えて行なったことがあった。しかしそれほど長い時間ゾーンを使用しなかった。

2.2.4.4. フリースローとプレス

フリースローの後、様々なプレスを利用した。

フルコートマンツーマンプレスからマンツーマン。

1-2-1-1 ゾーンプレスからマンツーマン。

1-2-1-1 ゾーンプレスから 3-2 ゾーン。

2.2.4.5. ディフェンスリバウンド（表7）

セカンドチャンスの失点として平均 11.9 点であるが、イラン戦で 15 点、中国戦で 11 点、フィリピン戦で 8 点である。

ヨルダンのように特別な戦術を使ってマッチアップしている印象はないが、よくリバウンドがとれている。

2.2.4.6. ディフェンスとファストブレイク（表7）

ターンオーバーからの得点が平均 14.3 点であった。それほど無理に速く攻めている印象はないが、ガードが1対1状況でドリブルで攻め込み、決めてくるようなファストブレイクが多い。

3メンブレイクというよりは1人または2人でのブレイクシーンが多く見られるように感じる。

2.2.4.7. ファストブレイクでの失点（表7）

相手にやられた点数は 62 点（平均 6.9 点）であり、自チームの 93 点（平均 10.4 点）より下回っている。トランジションディフェンスが良かったことを示している。

2.2.4.8. ターンオーバーからの失点（表7）

相手にやられた点数は 76 点（平均 8.4 点）であり、自チームの 129 点（平均 14.3 点）より下回っている。ターンオーバーが少なく、オフェンスがしっかりしていることを示している。

2.2.4.9. ペイントでの失点（表7）

相手にやられた点数は 260 点（平均 28.9 点）であり、自チームの 274 点（平均 30.4 点）より下回っている。インサイドディフェンスを強化していることを示している。

3 考察

3.1. ビッグマンを擁するチームに対するオフェンス

3.1.1. トライアングルオフェンス

今大会ヨルダンが用いたオフenseである。マイケルジョーダン擁するシカゴブルズがこのオフenseを用いて連覇を遂げたこともあるオフenseである。

ビッグマンのマッチアップをアウトサイドに出すことによってそのプレイヤーの3ポイントを狙うことができる。イラン戦での重要な3ポイントを決めた#13はこの位置からのショットであった。

ビッグマン以外のプレイヤーのポストアップを容易に行うことができていた。ヨルダンの#5、#10のポストアップは中国、フィリピンに対して有効であった。このプレーをビッグマンがヘルプしようとする5番プレイヤーがノーマークとなり3ポイントが打てるプレイヤーであればそのローテーションは難しいものとなる。トライアングルオフenseはスペースが広いオフenseであり、それは特にヘルプサイド側にチャンスができています。

エントリープレーからピック&ロールへ移行するケースが多かったが、スペーシングが広くとれているのでボールマンがアタックしやすいオフenseである。オフenseリバウンドの問題があるが、ヨルダンは#14を筆頭によくペイント内に入ってきて絡んでいた。ポイントはリバウンドへ入っていく意識ではないかと思われる。

試合毎にエントリーパターンを変えていた。展開してからダウンスクリーンに行きハンドオフプレーを作る場合、展開してからカッティングをする場合、コーナーパスしてカッティングからピック&ロールに行く場合、展開してからダウンスクリーンではなく逆の動きをする場合があった。対戦国がスカウティングをして対策を取ってくることに對してのカウンターであり、ディフェンスが的を絞り込めていなかったようにみえた。アジア選手権は短期決戦であり、ディフェンスがそれだけ準備にかけられる時間は少ないが、2次リーグと決勝トーナメントにおいては時間が多少とれることからこういった変更は必要であり、それだけの準備をしておく必要があると思われる。逆にディフェンス側からすればそういった変更があり得ることを想定して準備する必要があるということである。

3.1.2. ホーンセット

多くは4、5番プレイヤーがハイピックを作る形のオフenseである。ヨルダンの他、フィリピンも使っていた。ビッグマンがいない場合には高い位置

にビッグマンを引き出すことによってペイント内が広く使えること、ビッグマンが出てこない場合にはピック&ロールなどでボールマンがフリーになることがポイントである。

ヨルダンは#5のピック&ロールの場合、ホーンセットの形からピックしてスクリーナーがフレアスクリーンしてアウトサイドを狙ったりする場合、ホーンセットの形からダウンスクリーンを作りハンドオフプレーに行く場合、ボールマンにリピックする場合、トレールプレーからフレアスクリーンを狙う場合などが見られた。これらも試合ごとに使うパターンを変えてスカウティング対策をしていたと思われる。

ホーンセットではピック&ロールからダイブしてハイローを狙う形も一般的であるが、ビッグマンがいるチームに対してはハイローがチャンスとなるケースが少なく、アウトサイドにチャンスを作り出そうとする意図が多く見られた。

それほど多くは利用されていないが、ビッグマン対策として有効なセットであると思われる。

3.1.3. プリンストンオフense

韓国が用いたセットである。ハイポストに4番または5番プレイヤーが立ち、ローポストを空けている配置である。これによってベースラインが空くが、ディフェンス側のビッグマンはペイントから出ないことが多いため、ベースラインドライブをしてもブロックショットの影響を多々受けていた。

ショットにつながっていたパターンはトップでのフレアスクリーンである。このスクリーンにはスクリーナーディフェンスはスイッチしてこないことが多いためアウトサイドショットは打つことができていた。ただしその確率が低かったことが多かったため効果がうまく出ていなかった。

それほど多く使用はしておらず、レギュラーオフenseとはなっていなかった。シュートに行くまでにパスが多く使われ、手順が多くなるために時間がかかりシュート本数が減少することもあり使われない理由の一つではないかと思われる。

このオフenseがビッグマン対策として大変に有効であるとはいいいく部分が残るが、ハイポストオフenseの一つとして準備することは有効であると思われる。

3.1.4. 使用された2対2のプレー

ビッグマンを擁するチームに対して使われた2対

2はピック&ロール、ハンドオフ、ダウンスクリーン、ウイングとローポストの2対2などである。

印象としてビッグマンのいるチームに5番プレイヤーがローポストの1対1を仕掛けるのは少ない。韓国の#13 がイランの#15 やフィリピンの#11 に1対1を仕掛けたのを見たぐらいである。

ハンドオフプレーはビッグマンのディフェンスとしては出て行きにくいプレーであり、悪いポジションにいればドライブで抜かれてしまうこともある。ほとんどがドライブを守るために下がっており、ジャンプシュートを許すことになっていた。ボールマンディフェンスがハンドオフプレーに対してボールを持たせないようにファイトオーバーして守るケースは少なく、ボールを受けることができていた。それはこのプレーをより効果的にするために、ボールマンとなるプレイヤーにダウンスクリーンをかけてハンドオフに向かわせることで、より容易にボールを受けることができるようにしていたことが多かったためである。このプレーは有効なプレーであると感じられた。

ピック&ロールのオフENSEに対してサイドエリアではベースラインに追い込むディフェンス方法がよく用いられていた。これに対してのオフENSEがまだ不十分であり、チャンスを活かすことができていない。今後はこのディフェンスに対する攻撃の対策をしていくと予想される。

3.1.5. 5番プレイヤー以外のポストアップ

5番プレイヤー以外のプレイヤーのローポストプレーはビッグマンの影響によりフィニッシュまで至らないことが多いが、ビッグマンのマークマンがミドルレンジでノーマークになりやすいので、ミドルレンジのシュート力がある場合は有効な攻め手となり得るようである。韓国の#12 のポストアップから#14 のミドルやヨルダンの#5 や#10 のポストアップから#14 や#13 のアウトサイドシュートを作り出すことができていた。

マッチアップの状況を見て1〜4番のプレイヤーがポストアップをして攻め込んでいくことは重要な攻め手となり得ると思われる。

3.1.6. ゲームテンポとトランジション

ビッグマンを擁するチームに対してヨルダン、韓国ともに無理な早いシュートを仕掛けることはしていなかった。

韓国は中国に対してファストブレイクを徹底的に出させないゲームを行った。ファストブレイクが出そうになるとファウルでゲームを止めていた。韓国自身のファストブレイクも非常に少なくなったが、結果ロースコアの展開となり接戦に持ち込むことができていた。

ヨルダンはチャンスがあればトランジションを行い、ファストブレイクでの得点を狙うスタイルであった。相手のガード陣がレイアップなどゴール下での得点を挙げたときにはすぐにスローインして逆速攻を狙う姿勢が多く見られた。この狙いは非常にいい狙いだと感じられた。

ディフェンスでターンオーバーを誘い、速攻に結びつけることは重要な手立てである。ゲームの中でファストブレイクポイントは得点力を高める上で重要な要素であると思われた。1試合平均で10点前後であり、これをなくすと総得点が10点近く減ってしまうことになる。したがってすべての速攻を止める必要はなく、スティールからや相手のトランジションディフェンスが悪いときには常に攻め込む姿勢を持ちながら、悪いシュートを打たない判断力をもってゲームテンポをコントロールすることが重要であると思われた。確率の悪いシュートを多く打っても相手は長身のためリバウンドを確保する確率が高く、相手の攻撃回数を高めることにつながってしまうためである。トランジションでの早打ちはヨルダン、韓国ともに行っていなかったことからいえるのではないかとと思われる。

3.2. ビッグマンを擁するチームに対するディフェンス（表8）

表8に各国がゲームごとに用いたディフェンス戦術をまとめた。中国はほとんどマンツーマンから変えていない。ヨルダン、韓国はゲームごと、ピリオドごとで変化を見せている。

3.2.1. ローポストディフェンス

ヨルダンはそれほど多彩なパターンを用意してはいなかったようである。マンツーマンでもゾーンでもローポストでボールを持たれた後は同じ対応をしていた。その対応とはボールマンディフェンスはベースラインへ追い込み、ゴール下で待つヘルパーがベースライン側でヘルプしてトラップするという方法である。

この対応が大変効果を上げていた。その効果を上

げた要因としては身体の寄せ方の技術、コンタクトに負けない強さ、ヘルプでコンタクトする位置取りにあるのではないかと考える。

身体の寄せ方は、ボールマン、ヘルプディフェンスの両者にいえることである。ボールマンディフェンスはボールを持たれたときにはほぼ密着して隙間を与えないようにし、ミドル側を制限してベースライン側へ追い込むスタンスを取っていた。間に合わないときにはミドル方向もやられていたがその際にはヘルパーがミドル側からヘルプに行きトラップへつなげていた。ボールマンは胴体で密着しながら押し込んでいたが、まずこの体の使い方ができれば長身者もペイント内とはいえ、ショットを多く落としていた。またヘルプディフェンスもハンズアップをしっかりと行い、胴体で相手の動作を受け止めてファウルにならないように注意していた。

ヨルダン、韓国ともにこの身体の使い方、寄せ方が強く上手であるように感じられた。身長が相手のビッグマンと比べ低いのは仕方がないが、この身体の使い方ですら1本目のショットを狂わせることは十分に可能であると思われた。

韓国はパスが入ったらすぐにトラップするパストラップとドリブルしたらトラップするドリブルトラップの2つと簡単にトラップしないインサイドヘルプの3パターンを持っていた。多く使っていたのはインサイドヘルプを使つてのディフェンスであった。

ボールマンディフェンスはヨルダンと同様に密着して、簡単に動きがとれないようにコンタクトしていた。その方向付けは特には見られなかったが、どちらの足を引くわけではなく平行なスタンスであった。容易にペイント内へ入れないように、腕と胴体を使つて中へ入ろうとする動きを押し出していた。

周囲のディフェンスはポジションをほぼペイント内に取っており、ペイント内のスペースがほとんどないような形であった。さらに腕をしっかり伸ばしてボールに触ろうとする動きがボールマンに大いに影響を与えていた。

どちらの形もインサイドからアウトサイドにボールが出た際のボールマンへのローテーションが速く、簡単なアウトサイドショットは打たせていなかった。ヨルダンが中国に対して行ったときには#14のアウトサイドショットにはそれほど強く出て行かず、ある程度は打たせる戦術をとっていたことはあった。そういった戦術を駆使できるローテーション技術を持つことが必要であると感じられた。

ヨルダン、韓国ともにいえることは戦術を遂行する個々のプレイヤーの強さ、技術があることが大前提になっているということである。ボールマンディフェンスが強く簡単に押し込ませないことができることでその動きが制限され、その周囲のヘルパーの役割が生きてくる。ヘルパーの身体の使い方が上手なことでその効果が出てくる。個々の強さを作り出す意識も重要な要素であると感じられた。

3.2.2. ゾーンディフェンス (表8)

ヨルダンはすべてのゲームでマンツーマンとゾーンを使用していた。ゲームテンポのコントロールにゾーンは有効な手段となり得ると感じられた。

ゾーンディフェンスの弱点としてリバウンドがあげられるが、ヨルダンはこの弱点をビッグマンにマッチアップすることでカバーしようとし、効果を上げていた。

アウトサイドショットを決められることはゾーンの場合出てくるが、ゲームの時間帯によりその成功率は一定でないことがゾーンの効果を高めている。前半に多く3ポイントを決められたとしても後半もそのまま続いたゲームはなかった。精神的なものか、疲労によるものか、ディフェンスの対応によるものかは明確ではないが、アウトサイドショットの確率を維持し続けることはなかなか難しい。こういった点でゾーンディフェンスを行うことで相手の強み(ビッグマンのインサイドプレー)をできる限り少なくし、アウトサイドショットに偏らせることでメンタル的にもプレッシャーをかけて平常(マンツーマンディフェンス)と違う状況を作り出すことは有効な手段となり得ると考えられる。

韓国は長い時間ゾーンを使用することはなかった。マンツーマンでのインサイドヘルプディフェンスのパターンが効果を上げていたこともゾーンの使用を少なくした要因かもしれない。

ゾーンディフェンスに対して中国はペネトレーションを意識して行ってきた。これに対してヨルダンは真ん中にポイントガードをおく2-1-2のゾーンディフェンスを行う時間帯があった。相手のオフェンスを見てディフェンスの対応を変化させる、こういったゲームの中での変更がゲーム運営のポイントであると思われた。

ヨルダンはめまぐるしくゾーンのパターンを変えたわけではないが、2-3、1-1-3、3-2、2-1-2、マッチアップゾーン、スイッチマンツーマン、マンツーマン

マンなどをプレスと混ぜながら使用していた。韓国は3-2、2-3、マッチアップゾーン、マンツーマンをフルコートマンツーマンと混ぜながら使用していた。

これらのゾーンディフェンスの準備はビッグマン対策としても必要であると考えられる。

3.2.3. ディフェンスリバウンド

身長をのさばるかがリバウンドに大きな影響を与える。ヨルダンはコンタクトをしっかり行うことで、ビッグマンをいいポジションに行かせないようにしていた。またコンタクトしながらも自らもジャンプをしてボールに触ろうとする動きを行っていた。こういった強さ、技術を身につけて実行することができれば身長差をカバーすることにつながると思われた。

ビッグマンをコンタクトでおさえ、アウトサイドにいるプレイヤーのマッチアップマンがリバウンドに飛び込んで取る形も重要である。ヨルダンの#10はガードながらディフェンスリバウンドを31本取り平均3.4本、#15が46本であり平均5.1本である。4、5番プレイヤーがおさえ、1～3番プレイヤーがリバウンドに飛び込んで取る形が必要である。韓国もディフェンスリバウンドの本数を多く取っているのは#8の48本（平均5.3本）であり、#14の47本（平均5.2本）や#12の38本（平均4.2本）より多い。

リバウンドは4、5番プレイヤーが取る、という意識ではなく、ビッグマンを擁するチームとの対戦では4、5番プレイヤーのコンタクトと1～3番プレイヤーがリバウンドに対する意識を持つことが重要であると考えられる。

3.2.4. ゾーンプレス（表8）

フリースローの後はゾーンプレスまたはマンツーマンプレスを用いていた。2-2-1 ゾーンプレスからゾーン、1-2-1-1 ゾーンプレスからゾーンやマンツーマンが多かった。フルコートマンツーマンは韓国が用いていた。

積極的にトラップに行く形はそれほど多くは用いられていないが、ボール運びに時間をかけさせること、ボール運びに神経を使わせるといった効果を狙っていることではないかと思われる。ゾーンプレスでレイアップに持ち込まれたケースは少なく、あまり広げすぎないようにプレスをしていることからそう言えると思われる。

フリースローの後はほとんどの場合でプレスが行われており、そのまま帰陣してディフェンスすることは少なかった。フリースローをディフェンスのチャンスをとらえて仕掛けていく姿勢は常に持つことが必要であり、オフェンスからすればそういった準備を常に怠らないようにすべきである。このプレスでスティールが成功して得点につながった場合、ゲームの流れが変わることにつながる。何でも無いようなプレスであるが、オフェンスにとってはミスなくボールを運び、ゾーンアタックにつなげなくてはいけない。こういったプレッシャーがプレスの効果としてあげられるように思われた。

3.3. アジア選手権の戦い方（1次・2次リーグと決勝トーナメントの試合形式から）

3.3.1. ヨルダンのフィリピンとの戦い（表9、表10）

フィリピンとは2次リーグ1試合目と準決勝で対戦した。

フィリピンとの1戦目と2戦目で大きく違うところとして、ディフェンスではフィリピンのFG%（①36%→②31%）の減少、フィリピンの3ポイント（①8/30、27%→②3/23、13%）の減少などによりフィリピンの得点が72点から61点に減少している。

フィリピンのアウトサイドの調子が悪かったこともあるが、ゾーンディフェンスによりシューターに対するチェックなどがスカウティングされたこともあげられる。

オフェンスではヨルダンの3ポイント試投数の減少とFG試投数の減少、FT試投数の増加（①14/23→②26/37）、ターンオーバーからの相手の得点の減少（①24点→②6点）、ヨルダンのファストブレイクからの得点の増加（①0点→②8点）であった。

ターンオーバーからの得点が増えたヨルダンに対してフィリピンは大きく減少した。この部分の差が大きい。相手の得点を下げるために自分達が簡単にターンオーバーをしないことが重要であることが読み取れる。

3.3.2. ヨルダンの中国との戦い（表9、表10）

ヨルダンは中国と2次リーグ2試合目と決勝で対戦した。

中国との1戦目と2戦目で大きく違うところとして、ディフェンスでは中国のFG%（①52%→②36%）の減少、中国のアシスト数（①13→②9）の減少、

中国のスティール数の減少 (①8→②4) によりターンオーバーからの得点が14点から8点に減少している。それに伴い中国の得点93点から70点に引き下げることに成功している。

オフェンスではヨルダンの3ポイント試投数の減少と2ポイント試投数の増加、ヨルダンのターンオーバー (①15→②9) の減少により、ヨルダンのFG%は27%から36%へ上がり、得点が60点から69点に増加している。

ディフェンス面では大きな戦術面の変更が見られるとは思えないが、決勝においてリードして試合を進められたことは大きい。またオフェンスで得点を入れることができていことから精神的にも落ち着きを見せてゲーム運びができたのではないかと推測する。ターンオーバーを少なくして相手の容易な得点を下げる、ディフェンスを頑張ることによって接戦となり、集中力が途切れなかったこと、悪いアウトサイドショットをほとんど打たなかったことなどが考えられる。

中国のFG%を引き下げたのはヨルダンのディフェンスであり、戦い方である。決勝という場面で中国も固くなり、シュートの入りが悪かった。この波に乗せないようにしながらのゲーム運びが前半は成功してリードを奪うことができたのではないだろうか。後半の立ち上がりは中国も集中力を増して連続得点により逆転に成功した。しかしそこから引き離されることなく接戦に持ち込むことができた要因は、オフェンスで悪いショットを打たないようにしながら、シュートが当たる時間帯まで我慢できたこともあげられるのではないだろうか。オフェンスでのシュートセレクションや誰がショットを打つか、それほど間違いではなくチームのリズムが壊れなかったことで最後まで接戦にすることができた。ゾーンディフェンスとマンツーマンディフェンスの併用によるゲームテンポのコントロールも大きな要因であり、コーチの力を感じる。

ヨルダンが準々決勝以降、集中力を増して簡単にターンオーバーをしないように注意して相手に簡単なレイアップを許さなかった。戦術的に大きな変更が見られたようには思えない。多少のマッチアップや注意すべき点の修正はあったものと思われるが、大きくはゲームテンポを壊さないオフェンスでありディフェンスをやり抜く集中力が保たれたことが大きいのではないだろうか。これがターンオーバーの減少にもつながり、フリースローの増加にもつなが

っていったのではないかと考えられる。

3.3.3. 韓国のメンバーの使い方 (表11)

韓国のメンバーの使い方についてはプレータイムを見るとそのコーチの意図が理解できる。相手のレベルが低く容易に勝てる相手の場合には控え選手を多く使う。主力選手でガードの選手は運動量が要求されるもあり、重きを置くゲームとそうでないゲームでプレータイムを大きく変えているようである。日本戦に対して、あまり重きを置いていないように思われる。控えのガード中心でプレーしても点差をつけられてしまう現状の日本と韓国の差がこの大会では感じられた。#13HAは体力的な問題もあり1試合でのプレータイムには制限があるようである。すべての試合にまんべんなく出ることもなく、間を空けながらコンディションに気を配って大会をこなしていることがわかる。

#8、#12、#14についてはすべてのゲームで多くの時間プレーしており、主力として頼りにしているようである。またはインサイド陣が多く控えがおらずプレータイムの増加につながっているともいえる。

3.3.4. 決勝トーナメントでの戦い方

各チームともに予選で力を使い尽くすのではなく、決勝トーナメントから集中力を上げて最終日に向けて調子を上げていく戦い方である。

そういった意味では今大会イランがその戦い方を誤り、決勝トーナメントで敗退し5位となったことは、イラン-ヨルダン戦で番狂わせといえる試合をしたことによるものである。この試合を突破していればイランはおそらく決勝で中国と戦いどちらが勝ったかわからない力を持っているように思われた。しかしこの試合を突破したヨルダンは2次リーグで負けているフィリピンを破り、決勝でも中国相手にあわやのゲームを展開した。

決勝トーナメントの初戦はチームとしての勢いを持つためにもとても大切であると感じられた大会であった。

4 まとめ

本論は長身者を擁するチームに対しての戦術面の考え方をオフェンス・ディフェンス両面から考察することおよびアジア強豪各国チームのバスケットボールを明確にすることを目的とするものであった。

まとめは以下の通りである。

- 1) 長身者を擁するチームへのオフェンスとして、トライアングルオフェンス・ホーンセットは効果的な戦術である。
- 2) グループ戦術としてはハンドオフプレー、ビッグマン以外のローポストプレーなどが有効なプレーである。
- 3) ゲームテンポのコントロールはとても重要であり、ターンオーバーを減らすことが相手のファストブレイクをおさえることにもなり、接戦に持ち込む要素となる。
- 4) 長身者を擁するチームへのディフェンスとして、ローポストディフェンスおよびリバウンド対策が重要である。
- 5) 個々の強さと判断力はとても重要な要素である。

- 6) アジア選手権を戦い抜き、結果を得るためにはゲームごとにオフェンスエントリーを変えたりすることは必要であり、決勝トーナメントへの戦い方と決勝トーナメントでの戦い方の両方が重要である。
- 7) マンツーマンとゾーンの併用は重要であり、ピリオドごとに変えたりすることでゲームテンポをコントロールする方法は重要である。
- 8) 長身者を擁するチームへのリバウンドは、コンタクトをしてのポジション取りやコンタクトしながらのジャンプ、1～3 番プレイヤーのリバウンドへの意識向上が重要である。
本論で得た知見を実践で活かしていきたいと考える。

表 1 各国のメンバー表

Jordan			Height	Age	Korea			Height	Age	China			Height	Age
4	Mohammad Hussein		205	21	4	Chanhee Park		190	24	4	Jinhui Ding		204	21
5	Rasheim Wright		189	30	5	Jung-Suk Lee		183	29	5	Wei Liu		190	31
6	Ali Jamal Zaghab		205	23	6	Donggeun Yang		180	30	6	Bo Zhang		198	20
7	Abdalla Abuqoura		202	27	7	Byung-Hyun Kang		193	26	7	Li Yi		202	23
8	Khaldoon Abu Ruqayah		204	28	8	Taejong Moon		198	35	8	Fangyu Zhu		201	28
9	Enver Soobzokov		201	33	9	Yong-Hwan Kim		195	27	9	Yue Sun		205	25
10	Osama Dagheles		198	32	10	Sungmin Cho		189	27	10	Zhaoxu Zhang		221	23
11	Wesam Al-Sous		189	28	11	Hee-Jong Yang		194	27	11	Jianlian Yi		212	23
12	Mahd N.J.Abdeen		185	23	12	Joo-Sung Kim		205	31	12	Shulong Yu		185	21
13	Zaid Naem Alkhas		198	35	13	Seung Jin Ha		221	26	13	Wei Su		212	22
14	Islam Abbaas		200	31	14	Sekeun Oh		200	24	14	Zhizhi Wang		214	32
15	Zaid Ahmed Abbas		203	27	15	Jongkyu Kim		207	20	15	Mugedaer Xirelijiang		191	20
HC	Thomas Anthony Baldwin		198.3	28.2	HC	Jae Hur		196.3	27.2	HC	Robert Micheal Donewald Jr.		202.9	24.1

Philippines			Height	Age	Iran			Height	Age	Japan			Height	Age
4	Mak Andy Barroca		176	25	4	Saeid Davarpanahfard		191	24	4	Kenjiro Matsui		188	25
5	Pauliasi Taulava		208	38	5	Aren Davoudichegani		185	25	5	Ken Takeda		188	32
6	Joseph Evans Casio		176	25	6	Javad Davari		185	28	6	Ryouta Sakurai		194	28
7	Jim Alapag		176	33	7	Mahdi Kamrany		186	29	7	Takumi Ishizaki		188	27
8	Christopher John Tiu		178	26	8	Mehrad Atashi		188	25	8	Shinsuke Kashiwagi		183	29
9	Japeth Aguilar		208	24	9	Arsalan Kazemi		199	21	9	Takuya Kawamura		193	25
10	Marnel Baracael		188	26	10	Hamed Afagh		190	28	10	Kosuke Takeuchi		206	26
11	Marcus Douthit		210	31	11	Oshin Sahakian		200	25	11	Tomoo Amino		196	30
12	Kelly Williams		199	29	12	Asghar Kardoust		212	25	12	Kenta Hirose		193	26
13	Marcio Tsongo Lassiter		188	24	13	Hamed Sohrabnejad		202	28	13	Takeki Shonaka		180	27
14	Christopher Ryan Lutz		190	26	14	Samad Nikkhah Bahrami		198	28	14	Atsuya Ota		206	27
15	Ranidel De Ocampo		193	29	15	Hamed Hadadi		218	26	15	Joji Takakeuchi		206	26
HC	Rajko Toroman		190.8	28.0	HC	Veslin Matic		196.2	26.0	HC	Thomas Wisman		193.4	27.3

表2 ヨルダンの個人得点

Jordan		シリア	日本	インドネシア	中国	アラブ	フィリピン	イラン	フィリピン	中国	PPG
4	Mohammad Hussein	0	0	10	4	5	0	2	0		2.6
5	Rasheim Wright	20	30	18	11	16	16	12	24	26	19.2
6	Ali Jamal Zaghab	5	11	1	2	13	2	7	5	4	5.6
7	Abdalla Abuqoura	1	5	2	1	2	7		9	2	3.6
8	Khaldoon Abu Ruqayah		3	11	0	4		2	0	0	2.9
9	Enver Soobzokov	5	5	6	3	3	0	4	0	0	2.9
10	Osama Dagheles	19	2		10	20	18	23	16	10	14.8
11	Wesam Al-Sous	5	9	14	0	6	5	12	2	7	6.7
12	Mahd N.J.Abdeen										
13	Zaid Naem Alkhas	0		6		2		14	0	3	4.2
14	Islam Abbaas	8	15	14	12	10	6	2	5	4	8.4
15	Zaid Ahmed Abbas	8	7	7	17	13	10	10	14	13	11.0
		71	87	89	60	94	64	88	75	69	

表3 ヨルダン9ゲームトータルスタッツ (公式スタッツより)

No	Jordan	START	MIN	PTS	FG	FGA	FG%	3P	3PA	3P%	2P	2PA	2P%	FT	FTA	FT%	OR	DR	TOT	A	ST	BLK	PF	TO		
4	HUSSEIN Mohammad		44	21	7	17	41%	0	1	0%	7	16	44%	7	12	58%	6	9	15	0	1	1	3	1		
5	WRIGHT Rasheim	9	304	173	61	146	42%	11	39	28%	50	107	47%	40	55	73%	7	16	23	22	14	2	11	15		
6	JAMALZAGHAB Ali	4	180	50	20	47	43%	0	0		20	47	43%	10	16	63%	22	31	53	9	7	15	20	10		
7	ABUQOURA Abdalla	3	143	29	9	29	31%	0	1	0%	9	28	32%	11	25	44%	21	20	41	11	3	2	21	10		
8	ABURUQAYAH Khaldoon		49	20	8	19	42%	3	12	25%	5	7	71%	1	2	50%	2	4	6	2	1	0	4	1		
9	SOOBZOKOV Enver	3	190	26	9	44	20%	5	27	19%	4	17	24%	3	6	50%	14	23	37	13	5	1	10	10		
10	DAGHLES Osama	8	235	118	36	87	41%	7	18	39%	29	69	42%	39	54	72%	4	31	35	37	14	1	16	34		
11	AL-SOUS Wesam	1	172	60	22	61	36%	16	50	32%	6	11	55%	0	3	0%	3	16	19	13	3	0	16	6		
12	ABDEEN Mahd N.J.																									
13	NAEM ALKHAS Zaid		62	25	10	23	43%	5	14	36%	5	9	56%	0	0		1	13	14	1	2	1	10	5		
14	ABBAAS Islam	8	184	76	24	59	41%	2	11	18%	22	48	46%	26	32	81%	22	30	52	14	8	1	28	14		
15	AHMED ABBAS Zaid	9	237	99	38	83	46%	9	26	35%	29	57	51%	14	21	67%	18	46	64	10	11	5	35	18		
			MIN	PTS	FG	FGA	FG%	3P	3PA	3P%	2P	2PA	2P%	FT	FTA	FT%	OR	DR	TMR	TOT	A	ST	BLK	PF	TO	
TOTAL				1800	697	244	615	40%	58	199	29%	186	416	45%	151	226	67%	120	239	40	399	132	69	29	174	124

表4 ヨルダンの状況別得点 (公式スタッツより) Opp:対戦国

Jordan		シリア	日本	インドネシア	中国	アラブ	フィリピン	イラン	フィリピン	中国	合計	AVG	差
ターンオーバーからの得点	Jordan	22	5	13	13	30	14	23	18	15	153	17.0	4.1
	Opp	4	18	10	14	17	24	15	6	8	116	12.9	
ペイント内の得点	Jordan	32	42	38	24	62	32	28	26	26	310	34.4	6.0
	Opp	20	32	12	34	30	30	38	32	28	256	28.4	
セカンドチャンスでの得点	Jordan	17	11	24	11	11	19	8	7	15	123	13.7	-0.9
	Opp	16	25	5	17	5	15	15	14	19	131	14.6	
ファストブレイクポイント	Jordan	16	6	10	6	21	0	9	8	11	87	9.7	1.3
	Opp	4	14	4	15	14	6	8	4	6	75	8.3	

表5 韓国の個人得点

Korea		レバノン	マレーシア	インド	イラン	ウズベキスタン	台湾	日本	中国	フィリピン	PPG
4	Chanhee Park		0	0		14		6		0	4.0
5	Jung-Suk Lee	5	11	6	14	5	0	3	0	2	5.1
6	Donggeun Yang	20	8	2	14	2	10		17		10.4
7	Byung-Hyun Kang	6	6	22	3	8	0	2	1	8	6.2
8	Taejong Moon	18	11	14	10	21	15	17	6	8	13.3
9	Yong-Hwan Kim	0	6	6	0	2	9		6	1	3.8
10	Sungmin Cho	0	16	12	0	20	19	13	0	20	11.1
11	Hee-Jong Yang				6	16	2	3	4	1	5.3
12	Joo-Sung Kim	16	2	5	5	5	8	11	3	14	7.7
13	Seung Jin Ha		10		6		0	14	4		6.8
14	Sekeun Oh	13	13	6	2	8	14	15	2	9	9.1
15	Jongkyu Kim	2	6	11	2	5	5	2	0	7	4.4
		80	89	84	62	106	82	86	43	70	

表6 韓国9ゲームトータルスタッツ（公式スタッツより）

No	Korea	START	MIN	PTS	FG	FGA	FG%	3P	3PA	3P%	2P	2PA	2P%	FT	FTA	FT%	OR	DR	TOT	A	ST	BLK	PF	TO
4	PARK Chanhee	2	83	20	6	19	32%	6	11	55%	0	8	0%	2	4	50%	2	12	14	16	2	1	6	3
5	LEE Jung-Suk	1	160	46	15	38	39%	10	26	38%	5	12	42%	6	9	67%	8	14	22	21	6	0	13	9
6	YANG Donggeun	7	170	73	29	48	60%	6	16	38%	23	32	72%	9	12	75%	3	13	16	26	10	0	9	8
7	KANG Byung-Hyun	8	171	56	18	47	38%	11	31	35%	7	16	44%	9	14	64%	4	15	19	9	6	2	14	7
8	MOON Taejong	7	234	120	40	113	35%	22	71	31%	18	42	43%	18	25	72%	8	48	56	21	13	5	9	17
9	KIM Yong-Hwan		114	30	11	38	29%	5	24	21%	6	14	43%	3	7	43%	4	9	13	5	4	1	8	4
10	CHO Sungmin	2	136	100	33	72	46%	19	44	43%	14	28	50%	15	17	88%	6	13	19	12	8	0	14	6
11	YANG Hee-Jong	1	72	32	8	20	40%	2	9	22%	6	11	55%	14	24	58%	6	4	10	5	5	0	8	7
12	KIM Hee-Jong	8	230	69	25	63	40%	1	7	14%	24	56	43%	18	27	67%	15	38	53	37	7	10	27	20
13	HA Seung Jin	1	90	34	15	27	56%	0	1	0%	15	26	58%	4	10	40%	8	13	21	6	1	3	4	7
14	OH Sekeun	7	195	82	36	80	45%	0	2	0%	36	78	46%	10	15	67%	16	47	63	6	8	1	20	10
15	KIM Jongkyu	1	145	40	16	33	48%	0	0		16	33	48%	8	11	73%	14	24	38	5	6	8	23	7
		MIN	PTS	FG	FGA	FG%	3P	3PA	3P%	2P	2PA	2P%	FT	FTA	FT%	OR	DR	TMR	TOT	A	ST	BLK	PF	TO
TOTAL		1800	702	252	598	42%	82	242	34%	170	356	48%	116	175	66%	94	250	32	376	169	76	31	155	105

表7 韓国の状況別得点（公式スタッツより） Opp:対戦国

Korea		レバノン	マレーシア	インド	イラン	ウズベキスタン	台湾	日本	中国	フィリピン	AVG	差
ターンオーバーからの得点	Korea	23	20	7	13	28	9	14	2	13	129	14.3
	Opp	8	4	4	11	14	11	6	13	5	76	8.4
ペイント内の得点	Korea	36	36	24	22	24	38	36	24	34	274	30.4
	Opp	32	18	30	40	22	44	28	18	28	260	28.9
セカンドチャンスでの得点	Korea	7	20	15	4	16	13	20	2	15	112	12.4
	Opp	11	10	5	15	17	14	16	11	8	107	11.9
ファストブレイクポイント	Korea	12	23	5	7	13	8	7	4	14	93	10.3
	Opp	4	4	6	12	6	2	13	5	10	62	6.9

表8 ゲームにおける各国のディフェンス戦術

韓国-イラン(2次リーグ)		ヨルダン-フィリピン(2次リーグ)	
韓国	イラン	ヨルダン	フィリピン
1Q マンツーマン ポストインサイドヘルプ FT~1-2-1-1~3-2 ブレイクをファウルで止める FT~2-3	マンツーマン ピック=ブルー	マンツーマン ローポストドリブルトラップ ベースラインへ追い込む フレックスにスイッチ	マンツーマン スイッチ ローポストドリブルトラップ ベースラインへ追い込む 2-3ゾーン
2Q 2-3ゾーンマッチアップ	マンツーマン	2-3ゾーン ローポストドリブルトラップ	
3Q マンツと見せてゾーンへ マンツポストラップ FT~1-2-1-1~マンツ	#6フェイスガード		
4Q 4人でプレス ピックにスイッチ	マンツーマン		

ヨルダン-中国(2次リーグ)		ヨルダン-イラン(準々決勝)	
ヨルダン	中国	ヨルダン	イラン
1Q マンツーマン ポストドリブルトラップ ベースラインへ追い込む FT~2-2-1~2-3 ローポストに入ったら2-3の形へ	マンツーマン	マンツーマン 2-3ゾーン ローポストラップ	サイドピック~ブルー OBから2-3 #14がけがのため後半だけ
2Q FT~2-2-1~2-3 ローポストディフェンス=くつつく くつついてノミドル、2-3ゾーンの形 FT~フルコートマンツーマン~マンツ	マンツーマン	マンツーマン プレッシャーかける すぐにゾーン 4人がゾーンで#15にマッチアップ 厳しいディフェンス	2-3ゾーン
3Q マンツーマン ポストフロント サイドピック=ブルー 3-2ゾーン	マンツーマン	FT~ゾーンプレス 2-3ゾーン 4人がゾーンで#15にマッチアップ 2点やるならファウルでFTへ	フルコートディフェンス
4Q		マンツーマン 2-3ゾーン 2-2-1ゾーンプレス	マンツーマン

ヨルダン-フィリピン(準決勝)		韓国-中国(準決勝)	
ヨルダン	フィリピン	韓国	中国
1Q マンツーマン スイッチ マンツマンからゾーンのようなディフェンス FT~2-2-1ゾーンプレス マッチアップゾーン気味	マンツーマン 5番以外のポストアップに#11がよる FT~フルコートマンツーマン	マンツーマン ブレイクはファウルで止める ポストは間合いを詰める FT~フルコートマンツ 激しいディフェンスでベネトレイトさせない ハンズアップ効いている	マンツーマン
2Q 2-3ゾーン 身体の寄せ方がうまい ブロックショットが効いている	マンツーマン	悪いショットの後はファウルで止める 身体をとにかく寄せてくる ファウルトラブル	スイッチあり
3Q マンツからゾーンへ 2-3と3-2の中間 ゾーンでも#11にマッチアップ	マンツーマン	マンツーマン たくましいディフェンス インサイドヘルプ レイアップを出させない	
4Q ゾーン=リバウンドがとれている スイッチディフェンス	2-3ゾーン	FT~フルコートマンツ 2-3ゾーン 正対して身体の寄せ方と周りのスナップヘルプが効いている ポストラップ5分 レイアップの最後までタフなブロック、身体の寄せ方 インサイドヘルプ=ペイント内にポジションを取る	

ヨルダン-中国(決勝)		韓国-フィリピン(3位)	
ヨルダン	中国	韓国	フィリピン
1Q 3-2ゾーン すぐにマンツーマン ポストラップ=ベースラインへ	マンツーマン	マンツーマン #11に#12	マンツーマン
2Q ゾーン	マンツーマン	インサイドのプレーに対して周りのスナップ ゴール下の1対1への周りのブロックショット	
3Q マンツマン ゾーンプレス~ゾーン	マンツーマン	2-3ゾーン ポストバストラップ	
4Q PGが真ん中にいる2-1-2 2-3ゾーン	マンツーマン	インサイドヘルプからドリブルトラップ 身体の寄せ方がよい リバウンドを取られたらすぐにマークしてプレッシャー バストラップ=バサのディフェンス	ブレイクはファウルでFTへ

表 9 ヨルダンの中国・フィリピン 1 戦目と 2 戦目の比較（公式スタッツ）

		PTS	FG	FGA	FG%	3P	3PA	3P%	2P	2PA	2P%	FT	FTA	FT%	OR	DR	TOT	A	ST	BLK	PF	TO
中国 2次リーグ	Jordan	60	18	66	27%	5	23	22%	13	43	30%	19	31	61%	19	22	41	10	6	6	19	15
	China	93	34	65	52%	11	22	50%	23	43	53%	14	21	67%	14	34	48	13	8	10	25	16
中国 決勝	Jordan	69	27	76	36%	6	18	33%	21	58	36%	9	13	69%	18	26	44	12	8	3	22	9
	China	70	24	67	36%	5	20	25%	19	47	40%	17	22	77%	19	30	49	9	4	11	15	15
フィリピン 2次リーグ	Jordan	64	23	73	32%	4	26	15%	19	47	40%	14	23	61%	22	31	53	8	6	3	23	19
	Philippines	72	24	67	36%	8	30	27%	16	37	43%	16	19	84%	12	31	43	15	5	2	26	14
フィリピン 準決勝	Jordan	75	22	53	42%	5	17	29%	17	36	47%	26	37	70%	13	31	44	11	8	2	17	17
	Philippines	61	22	70	31%	3	23	13%	19	47	40%	14	18	78%	17	25	42	10	4	2	29	16

表 10 ヨルダンの中国・フィリピン 1 戦目と 2 戦目の比較（状況別）

		フィリピン(1)	フィリピン(2)	中国(1)	中国(2)	AVG	差
ターンオーバーからの得点	Jordan	14	18	13	15	17.0	4.1
	Opp	24	6	14	8	12.9	
ペイント内の得点	Jordan	32	26	24	26	34.4	6.0
	Opp	30	32	34	28	28.4	
セカンドチャンスでの得点	Jordan	19	7	11	15	13.7	-0.9
	Opp	15	14	17	19	14.6	
ファストブレイクポイント	Jordan	0	8	6	11	9.7	1.3
	Opp	6	4	15	6	8.3	

表 11 韓国の個人別プレータイム

	Korea	レバノン	マレーシア	インド	イラン	ウズベキスタン	台湾	日本	中国	フィリピン	Time
4	Chanhee Park		10	20		20		23		11	16.8
5	Jung-Suk Lee	18	20	16	26	16	10	19	5	29	17.7
6	Donggeun Yang	38	24	4	28	10	30		35		24.1
7	Byung-Hyun Kang	15	20	30	22	18	18	9	19	18	18.8
8	Taejong Moon	33	16	15	30	20	26	30	34	29	25.9
9	Yong-Hwan Kim	15	20	20	5	14	10		24	7	14.4
10	Sungmin Cho	1	20	25	3	20	21	28	1	17	15.1
11	Hee-Jong Yang				14	20	14	11	3	10	12.0
12	Joo-Sung Kim	38	21	10	30	16	27	33	25	31	25.7
13	Seung Jin Ha		15		24		6	19	26		18.0
14	Sekeun Oh	36	14	20	13	16	20	24	25	30	22.0
15	Jongkyu Kim	6	20	40	5	30	18	4	3	18	16.0
		200	200	200	200	200	200	200	200	200	

（原稿受理日 2013 年 1 月 17 日）